

年は約50名で、盛大に肅行されました。69会が半数を占める偕行合唱団（和田代表）も献歌を行い、これに寄与しました。69会からの参列者は次の7名。

柳澤壽昭、今野茂雄、渡邊榮樹、神保明生、正本禎亮、森充、和田明範。

同期生訃報

（逝去を悼み謹んで冥福を祈ります。）

- ・勝美治様（令和5年8月13日）
- ・重松正久様（令和7年1月24日）
- ・益田修様（令和7年7月6日）
- ・赤谷信之様（令和7年7月12日）
- ・熊本毅様（令和7年7月22日）

最後に

新年における皆様のご多幸と益々のご発展をお祈りいたします。



青森県偕行会

町集会所で初の青森県総会

会長 稲村孝司 陸自75

青森県偕行会は、晩秋の10月25日、会長が町会長を務める町会集会所会議室において令和7年度の総会を開催した。昨

年までは旧弘前偕行社での開催を慣例としていたところ、同偕行社が弘前市管理となり、無料だった貸館使用料が生じることから同集会所での開催となった。

今年は大きな報告・審議事項があり、今年度の全国会長会同で問いかけられた次の三つの問題への回答案についてだった。①「公益財団法人としての業務を整育と行えるか？」②「会員の高齢化、会員の減少の中、活動は可能か？部隊との交流、会員獲得は可能か？」③「支援金が減少する中、活動は可能か？」である。総会は、例年の国歌斉唱、物故者への黙祷及び自己紹介を省略し、会長挨拶、次いで事業報告及び会計報告を手短に済ませ本題に入った。

まず、約1時間かけて会同の目的である「支部化（公益財団法人化）」へ移行するには厳しい状況について、7個の偕行会が活動を停止したこと、会員の高齢化と会員の減少に悩んでいること、各地偕行会への支援費の捻出が厳しくなっていること、公益財団法人に対する業務の監督が厳しくなったことを報告した。

次いで、陸修偕行社と各地偕行会の連携と課題等について昭和27年から令和6年までの経緯をたどり説明した。特に、令和3年には「当面の間は『緩やかな関係』を維持する」将来的には公益財団法人としての透明性確保の必要性に加え、「本部と支部」の関係に移行することの

検討が始まり、各地偕行会の意向確認が必要とされ、検討すべき課題が明らかになった事を強調した。

引き続き、支援費等の推移（経費面での課題）について、昭和32年から支援費支給が始まり、平成24年頃から逐次拡大・増額され、同29から30年度には460万円程度まで拡大されたものの、令和に入り逐次削減され、穴見財団の助成金により一時改善されたが、同助成金交付が厳しくなり支援費減額となったことを説明した。その結果、令和7年度事業計画では陸修偕行社と各地偕行会の関係が確立されるまでの間、引き続き現行の「緩やかな協力関係」を基本として、予算が許す範囲で各地偕行会が行う公益目的事業が支援されることを説明した。

次いで、陸修偕行社と各地偕行会との連携（事業について、10個の事業の中で、継続事業は4個、外す事業1個、行わない事業2個、削除する事業2個、協力事業1個について説明した。

更に公益財団法人について、設立の条件、認定基準、事業について説明した。

その後、支部化に伴う事業と経費に係わる業務について、現在の状況と支部化による状況を対比して資料に基づき説明した。支部化への懸念事項とコメントについては、支部化となった場合の懸念事項として、次の三点に区分して説明した。①事業と経費に係わる業務の負担が増大

する。特に、事業計画書・収支予算書、事業報告書・収支決算書等の作成と報告は、「定型用紙での作業」と「定められた時期迄の業務」が求められることを強調した。②政治活動が出来ないなどの活動の自由がなくなる。③独自の資産の保有は出来ない。資産の運用は、法律に基づき実施するとともに、内閣府報告を伴うことである。

公益財団法人陸修偕行社の活動紹介では、昨年12月5日に当会主催の「防衛講話の開催」に対する協力事業の紹介があったことを報告した。

報告・説明の最後には「支部の活動における隊友会との関係」について、陸修会は隊友会との関係を整理して設立されたことを述べた。その内容は「隊友会と陸修会は相互補完の関係にあり、会員は陸修会と隊友会とのダブルキップであることが望ましい」ことを強調し、隊友会などの友好団体と協力して陸上自衛隊の活動への支援の輪を広げる活動を行うことが大切であるとされたことを述べた。更に、陸修偕行社も、陸修会と隊友会の関係を踏襲することを説明した。約10分の休憩の後に、意見交換を始めた。会員の多くは隊友会会員でもあり、平成23年から始まった隊友会の公益社団法人化への移行を体験した支部長が二人居り、小生も副支部長として規約の変更及び規則類の制定に苦勞し、更に法人化移

行後の業務、事業計画書・収支予算書、事業報告書・収支決算書等の作成と報告は、「定型用紙での作業」と「定められた時期迄の提出」には、困難を極めた事が脳裏に刻まれていた。そのことから、現在の会長、副会長一人、事務局長は会長兼務、会計部長の態勢では「業務を整斉と行うのは極めて困難」との結論に達した。

次いで、会員の高齢化、会員の減少の中、「公益事業を主とした活動はほとんど不可能」また、部隊との交流、定年退職幹部の名簿入手が困難の中、会員獲得は「ほとんど不可能」との結論に達した。最後の支援金が減少する中、公益事業を主とした活動は「困難」との結論に達した。一縷の望みとして、会員の多くは隊

友会とのダブルキャップであり、これまで通り隊友会と共同での活動は可能であろうとの意見だった。また、態勢強化策として、副会長一人の追加と事務局長の人選が必要とされた。陸修偕行社への要望事項も挙げてはとの意見もあったが、今回は問いかけられた三つの問題への回答だけに絞るべきとの結論に達した。

写真撮影の後、引き続き懇親会は9名の出席となった。約2時間の会話では、今後の会運営は益々厳しさが増す状況となることが確認された。弘前市の状況をもてこの8年間で2万人の人口減少があり、デパート、老舗のホテル、和菓子屋、本屋などが閉店し寂れるばかりであるとか、5年に一度の国勢調査を務める調査員からは留守家庭が多く調査が困難な状況が、町会長からは町会運営の厳しさ、民生委員のなり手がいないことが、地域社会福祉関係者からは助け合い募金、赤い羽根募金集めの厳しさが、地区保護司会会長からは保護司のなり手がないうことなど愚痴の語り合いとなった。来年初の花見は旧弘前偕行社での開催を諦め、安原第二児童公園で行うことを告げ、再会を期してみつわ会館を後にした。

北海道偕行会全道大会

北海道偕行会（代表世話人陸自65期木村清順）は第80回北海道偕行会全道大会を、ご来賓に北部方面総監部幕僚副長・

